

## 浅海重夫教授の停年退官に際して

式 正 英

平成2（1990）年3月末をもって浅海重夫先生は、めでたく停年を迎えられ、本教室を去られることになった。「本当に長い間御苦勞様でした」と心から感謝の辞を献げる次第である。先生が東京大学理学部地理学科を卒業されたのは、昭和22（1947）年9月、直ちに西が原の農林省農業技術研究所で任官されて、土壌調査の基礎的研究に従事されることになられた。

日本の土壌調査は今でもそうだが、明治以来、農林省の関係機関によって組織的に実施されて来ている。仄聞する処によると、その当時若手の地質・地形研究者3名を急に農林省が採用する方針となった折、そのお1人として先生に白羽の矢が立った。戦後、アメリカ方式の土壌調査が導入される機運が到来し、その理解を早急に深める必要から、地形学や地質学からの協力が要請されるという背景があったのであろう。

それから5年後の昭和27（1952）年11月、お茶の水女子大学文教育学部地理学科に先生をお迎えすることが決まった。その頃本教室から東京大学地理学科へ転出された吉川虎雄先生の後任人事であった。農業技研で土壌地理学研究的の端緒を掴まれ、それに没頭されておられた先生は、周囲からの慈愍に漸く応える形で、本教室に来られたのである。爾来37年間、先生は本教室において、倦むことなく職務に精励され、土壌地理学の研究と学生の教育に専念され、多数の専門課程の卒業生を育てあげて来られた。このことについては、今更とりたてて言うまでもなかろう。地道に歩まれて来た先生の功績は、その積重ねにおいて偉大なものがあり、本教室に関わる人材、器材の殆どすべてに涉って先生の息のかからぬものはないと云ってよい程である。

37年間は決して短い路のりではない。教室を取り捲く内外の環境は、この間に質的にも量的にも大きな変化を遂げた。学部学生の定員だけを見ても、昭和30年代前半の地理学科の1学年の学生定員は12名であったが、現在は22名と10名も増している。その上昭和41年から修上課程、昭和51年から博士課程ができて、大学の内容は大幅に変更があったし充実もされた。ただ教官定員の方は以前と比べて大した変化はなく、教官1人にかかる負担は相当に大きくなったままである。先生は学部はもとより修上、博士両課程をも併任の教授として、人一倍の重責を荷って来られた。

地理学科のある文教育学部棟1号館は昭和47（1972）年に完成して、現在の家政学部本館にあった古巣から引越しをしたのだが、当時新しい建物を建設するにあたって組織された建築委員会において先生はその委員長としても活躍された。それぞれ学科の利益代表である各委員の先生方は一騎当千の強者ばかりで、様々の意見が百出して調整は頗る難事であった筈である。これらをうまく裁かれ、古い建物の頃には想像もできなかったような形で、各自が新しいビルの所定の場所に落ち着いて大変快適に過ごせるようになった。これは先生の努力によるところが大きい。その功績でその後の文教育棟2号館の建設のときも建築委員長であられたように記憶している。

先生にお任せしておけば安心ということで大事な委員を随分沢山お願いしてそのまま過ぎてしまったものが多い。廃水管理委員，購入機種選定委員，RI実験室委員，生活環境研究センター運営委員など少しでも理系の範囲に関わる仕事は学部として先生をお願いして来てしまったようである。自然科学報告の編集委員も永久職のような形で先生が勤められていたし，理学部の地学基礎実験は創設以来，つい最近まで先生が担当され，文教育学部教官としては唯一お一人理学部の講義に関与されていた。一般教育地学（地質鉱物）も昭和36年赤木健先生が退官された後，筆者も含め数年は交代でこなして来たが，先生が一番長くお持ちになっておられたと思う。

自然地理学実験における実験室での分析作業や野外調査には，沢山の学生が受講し，余り他では体験のできない様々の分析方法や観察方法を学び，自然分野に興味をもった人も多い。先生御自身の研究の発展の基礎も，日本各地での土壌採取や野外での土壌断面観察，室内での土壌分析にあった。日本の学界とくに地理学界の中で，本格的な土壌地理学専攻の学者として通用する方は今のところ唯一人先生ぐらいではないかと思う。学界でも貴重な存在である先生に長い間面倒を見て戴いた地理学教室は誠に倅せ者であったとって過言ではあるまい。

又先生の社会的活躍についても触れておきたい。飯本先生からの継承と思われる文部省の学術用語選定のお仕事には長い間関わっておられたし，又昭和43年頃小笠原諸島の調査に携わられたのがきっかけで小笠原諸島開発審議会委員も兼ねて来られた。又，入試センターのお仕事を初めいくつかの試験関係の委員を経験しておられる。先生は日頃から寡黙で何もお話しにならないので，その全体を一気に掴むことはできないでいるが，それ程に社会も大学も先生には大変お世話になって来たのだという思いを今更ながら深くする。

これから先生が去られた後，地理学科としては先生の遺していかれた堅実さや美風を肝に銘じて，教育に研究に励んで行きたいと考えている。御在職中の先生は持病があって御健康がすぐれないようにお見かけすることもあったが，そのために長期に休まれたり入院されたりすることもなく，結果的には健康管理をうまくこなして来られたようにお見受けしている。御退官後も是非うまく健康を保持されて，益々お仕事をすすめられ，いつまでも私共を教導していただきたいと願うものである。

(1990年2月)